

『グリム童話集』初稿、初版、第7版における 「ヘンゼルとグレーテル」の変化について

大 島 浩 英

要 旨

Jacob GrimmとWilhelm Grimmのグリム兄弟によって編纂された*Kinder- und Hausmärchen* (『子供と家庭の昔話』)の中のものHänsel und Gretel (「ヘンゼルとグレーテル」KHM 15)を題材に取り上げ、このメルヒェンを初稿(1810)、初版(1812)、第7版(1857、決定稿)とでそれぞれ比較し、その違いを検討した。(初稿(1810)でのタイトルはDas Brüderchen vnd das Schwesterchen)

まず初稿では物語の進行が簡潔な平叙文(叙述文)で表現されることが多いのに対し、初版、第7版ではこれを登場人物の会話形式で説明する箇所が増加、さらに登場人物の動きや場面の描写がより詳しく、具体的な表現へと変化しており、特に第7版では新たな挿話も付け加えられている。各版におけるこういった変化を具体例に即して考察した。

キーワード：グリム童話、メルヒェン、昔話、ドイツ文学

はじめに

世界中に多くの読者をもつグリム童話集は、*Kinder- und Hausmärchen* (『子供と家庭の昔話』)というタイトルでグリム兄弟(Jacob Grimm, Wilhelm Grimm)によって編纂されたものだが、その初版が1812年に出版されて以来何度も版を重ね、1857年に発行された第7版が最終の決定稿とされている。その間、収録話数も初版の156話から第7版の200話まで増加していくが、各話の表現や内容に関しても大幅な改定が加えられている話が少ない。もともとメルヒェンは大人向けに語られた昔話であったと言われるが、グリム兄弟が生きた時代には中産階級における家庭の子供の立場が見直されるよう

になり、それに対応して子供を意識した読み物へとグリム童話集も書き換えられていった。

本原稿では、グリムのメルヒェンからHänsel und Gretel (「ヘンゼルとグレーテル」KHM 15) を取り上げ、これを初版以前の手書き原稿、初版、そして決定稿となった第7版とで比較し、その主だった相違点を考察することによってグリムのメルヒェン研究の一資料としたい。

なお、引用文、語形はすべて原文表記のままであるため、語の綴りが現代語とは異なる場合がある。また、....、(=...)、[...] は筆者。

使用テキスト：Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Band 1,

hrsg. von Heinz Rölleke, Stuttgart 1980. (KHM 15. Hänsel und Gretel)
(Siebente Auflage. 1857)

Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen.

Erstdruckfassung 1812-1815, hrsg. von Peter Dettmering,
Stuttgart 1980. (15. Hänsel und Gretel)

Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Die handschriftliche

Urfassung von 1810, hrsg. von Heinz Rölleke, Stuttgart 2007.
(11. Das Brüderchen und das Schwesterchen)

I

森のそばに住むきこり夫婦の窮乏状態を語る物語の書き出しの部分で、初稿ではEs war einmal ... (昔～) という昔話によく見られる表現から物語が始まるが、初版、第7版ではこの表現は用いられておらず、einmalという漠然とした時間の規定語ではなくVor einem großen Walde (大きな森の手前に) という場所を表す語句から初版、第7版は書き出され、より具体性の強い描写がなされている。次に木こり夫婦の窮乏状態を表現するために、初稿ではjämmerlich (みじめ)、(妻と2人の子供を) ernährenする(養う) ことがほとんどできない、という抽象的な表現がなされており、基本的食糧としてのBrot (パン) だけが具体的表現としてauch kein Brod (パンもない) という形で記述されている。これに対して初版ではjämmerlich、ernährenといった表現は見られず、この部分は明確にnichts zu beißen und zu brechen haben (食べるものが何もない) という慣用句と、das tägliche Brod (日々のパン) という表現に書き換えられ、さらに初稿でのBrüderchen (兄)、Schwesterchen (妹) に対してそれぞれHänsel (ヘンゼル)、Gretel (グレーテル) という一般的な実名が与えられることにより、物語に具体性が増している。また、この初版での書き換えは第7版でも同様に行われており、以後、初稿

でのBrüderchen、Schwesterchenは初版、第7版ではすべてHänselとGretelという実名で登場する。また、初版での各変更点に加えて、さらに第7版ではこの家族の窮乏状態を表現するものとしてgroße Teuerung（ひどい飢饉）という具体的原因も追加されている。

さてこういった状況での夫の心理状態は初稿ではin großer Angst（大きな不安におびえて）とのみ表現されているが、初版ではこのAngst（不安）を...wußte sich nicht zu helfen in seiner Noth（困窮から助かるすべを知らなかった）、...abends vor Sorge sich im Bett herumwälzte（夜に心配のあまりベッドで寝返りを打った）と表現し、第7版でも同様にsich vor Sorgen herumwälzteという視覚的な動作の描写へと書き改められている。²⁾

ヘンゼルとグレーテルを森へ連れ出し、パンを与え、焚き火をたいてそこに置き去りにするという提案の会話はすべて初稿、初版では共に妻から夫へのduに対する命令文...: nimm die beiden Kinder ... führ sie in den [großen] Wald, ...（あの子供たちを [大きな] 森の中へ連れ出しな）で表現されているが、第7版ではこれがwir wollen ... die Kinder hinaus in den Wald führen（子供たちを森の中へ連れ出そう）という勧誘の表現へと変化している。また子供たちを置き去りにする場所について初版、第7版では... wo er am dicksten ist（森の一番深いところ）という具体的な説明が追加されている。

初稿では子供たちを森に置き去りにすることについて、Der Mann wollte lang nicht, aber die Frau ließ ihm keine Ruhe, bis er endlich einwilligte.（夫はなかなかそうする気にはなれなかったが、妻は夫が承服するまで責め立てた）と簡潔に表現しているのに対し、初版、第7版では子捨てに気の進まない夫と³⁾、逆に積極的に夫を説き伏せようとする妻のそれぞれの態度が、次のような夫婦間での具体的な会話のやり取りで表現される。der Mann: ..., die wilden Tiere würden bald kommen und sie zerreißen.（獣どもがすぐにやって来て子供たちを引き裂いてしまうだろう）、die Frau: ...müssen wir alle...Hungers sterben（皆飢え死にするしかないよ）。さらに第7版では妻がdie Bretter für die Särge hobelen（棺桶の板でも削るがいいよ）と夫を罵倒する辛辣な表現が追加されている。これに対して初版ではmeine eigenen lieben Kinder（私の愛しい子供たち）、第7版ではAber die armen Kinder dauern mich doch.（でも子供たちがかわいそうだ）といった、子供たちに好意的な夫の発言も見られる。

II

さて、両親の話を兄妹が聞いてしまう場面⁴⁾で、初稿にはないが初版では...noch wach von Hunger、第7版ではvor Hunger auch nicht einschlafen könnenと、子供たちが空腹

で眠れなかったため両親の会話を聞いてしまうという窮状を示す理由説明が付加されており、また初稿のwas die Mutter gesagt hatte (母親が言ったこと) という表現に対して初版ではwas die Mutter zum Vater gesagt hatte、第7版ではwas die Stiefmutter zum Vater gesagt hatteというように「父親に」という妻の発話の対象がはっきり述べられている。さらに第7版では初稿、初版でのdie MutterがStiefmutter (継母) に書き換えられており、これは残酷さを軽減するために継母に書き換えられたものと思われるが、しかしStiefmutterという語はこの一箇所にはしか見られない。

森へ捨てられることを知って、初稿では妹が... fing an gar sehr zu weinen (激しく泣き出した)、初版ではグレーテルが... fing erbärmlich an zu weinen (あわれに泣き出した)、そして第7版ではGretel weinte bittere Tränen (グレーテルは悲痛な涙を流した) とそれぞれに異なった泣き方の描写がなされ、初版ではさらにその後Gretel dachte, nun ist es um dich geschehen (自分はもうおしまいだ、とグレーテルは思った)、第7版でも同様に„Nun ist's um uns geschehen“ (「わたしたちはもうおしまいね」) という諦観した発言が追加される。これに対して、「静かにおし (泣くのはおよし)」と兄が妹を慰める箇所について初稿ではDas Brüderchen sagte ihm (=Schwesterchen) es solle still seyn und tröstete es.と間接話法で表現されているが、これが初版では„sey still, Gretel, und gräm dich nicht, ich will uns helfen.“ (静かに、グレーテル、悲しまないで、ぼくが何とかするよ) となり、第7版でもほぼ同様の内容で直接話法による表現へと書き換えられている。

さてヘンゼルが家の外へ出て小石を拾いポケットいっぱい詰めて込む場面において、初版、第7版では...zog sein Röcklein an (上着を着て)、...machte die Unterthüre auf (くぐり戸を開け) というように具体的な動作の描写が追加挿入され、さらに外で輝いている月に関する初版、第7版ともにhell (明るく) という副詞が、またdie weißen Kieselsteine (白い小石) が輝く様子に対してもwie lauter Batzen (銀貨のように) といった比喻表現が加えられ、視覚的印象を強調する表現が追加挿入されている。小石を拾って戻ってきたヘンゼルは初稿ではそのまま寝床に就くが、初版、第7版では安心して眠るようとグレーテルに慰めの言葉をかける。その際第7版においてはさらに„Gott wird uns nicht verlassen“ (神様はぼくたちをお見捨てにはならないだろう) という発言が加わり、神への祈りというキリスト教的色彩が第7版では追加表現されている。

翌朝子供たちを起こして森へ連れて行く際に、子供達にはそれぞれパンが与えられるが、これについて初版では...aber haltets zu Rathe und hebts euch für den Mittag auf. (それを節約してお昼に取っておきなさい)、第7版では...aber eßt's nicht vorher auf (お昼前にそれを食べてはいけませんよ) という文言が加わり、さらに第7版では...weiter kriegt ihr nichts. (後は何ももらえないんだよ)、また...und Holz holen (薪を取りに)

『グリム童話集』初稿、初版、第7版における「ヘンゼルとグレーテル」の変化について

という森へ行くためのもっともらしい理由が追加され、自然な会話文へとふくらまされている。

次に両親と兄妹が森へ向かう途中で、ヘンゼルが立ち止まって家の方を振り返る動作の反復描写について、初版では..., bald darauf wieder und immer wieder (すぐにまた何度何度も)、第7版でも...und tat das wieder und immer wiederという表現が加わり、動作の繰り返しがより強調されている。そして、屋根の上でさよならをしている白い猫を見ていた、というヘンゼルの言葉に対する母親の発言で、初版では„ei Narr“ (おや、ばかだね)、第7版でも„Narr“という呼びかけ語が入る会話文になっているが、初稿にはこの呼びかけ語がなくこれに代わって...: geh nur fort, ... (さっさと歩きな) という命令文が入っている。また、この母親の発言をはさんで初稿では...heimlich ließ es aber immer einen von den weißen Kieselsteinchen fallen. (しかしひそかに兄は白い小石の一つ一つを落とし続けていた) と、..., und immer ließ er wieder ein Steinchen fallen.の二箇所で「小石を落とす」動作が述べられており、手書き原稿において動作説明を繰り返す現象が見られる。

III

さて両親と兄妹が森の真ん中に到着し初稿で父親がDa machte der Vater ein großes Feuer an, ...と大きな焚火をおこす動作が平叙文で説明される箇所について、初版、第7版では„nun sammelt Holz, ...“ (薪を集めておいで)、Hänsel und Gretel trugen Reisig zusammen, einen kleinen Berg hoch (ヘンゼルとグレーテルは小枝を集めて、小さな山のように積み上げた) のように、「薪を集めろ」という会話文による子供たちへの命令指示と、薪点火までの具体的動作が追加説明されている。また、子供たちを焚火のそばに寝かせて置き去りにする両親の口実として述べられるのは、初稿では...Holz suchen (木を探してくるから)、初版では...das Holz fällen (木を切り倒してくるから)、第7版では...hauen Holz (木を切ってくるから) となり、それぞれに異なった表現が用いられている。

焚火のそばで待つヘンゼルとグレーテルのもとに両親は戻ってこなかった、という初稿、初版での平板な記述の代わりに第7版では、父親が近くで木を切っている斧の音と思わせていたものが実は...es war ein Ast, den er an einen dünnen Baum gebunden hatte und den der Wind hin und her schlug. (それは父親が枯れ木に縛り付けた大枝で、風がその枝をあちこちにつつけていたのだった) という独特の記述が挿入され、これが子供捨ての行動に現実味を与えているものと思われる。また、第7版では...und als der Mittag kam (そしてお昼になった時) や初版のWie es nun finstere Nacht wurde (いよいよ真っ

暗な夜になると)といった説明が物語の進行に合わせて挿入されており、こういった記述の追加には時間の経過を実感させる効果があるものと思われる。

さて両親の迎えないまま夜になり、泣き出したグレーテルについて初稿ではdas Brüderchen tröstete es ... (兄は妹を慰めた)という平叙文で簡潔に表現しているのに対し、初版では„wart nur ein Weilchen, bis der Mond aufgegangen ist“ (月が昇るまでもう少しだけ待つんだよ)、第7版では„Wart nur ein Weilchen, bis der Mond aufgegangen ist, dann wollen wir den Weg schon finden.“ (月が昇るまでもう少し待つんだよ。そしてら道はきっと見つけられるさ)のように慰める行為が具体的な会話文の形式で表現し直されている。そして月が昇る表現については、初稿ではDa schien der Mond, ... (その時、月が輝いて)という状態の表現となっているが、初版ではUnd als der Mond aufgegangen war, ... (そして月が昇ると)、第7版ではUnd als der volle Mond aufgestiegen war, ... (そして満月が昇ると)というように、月が昇って行く動きが表現され、また第7版ではvoll (丸い)という月を説明する形容詞が追加挿入され具体的な描写がなされるなど、月が昇る表現が初稿、初版、第7版でそれぞれ異なっている。さらに、月の光によって照らし出される白い小石に対して初版、第7版ではwie neugeschlagene Batzen (真新しい銀貨のように)という比喩表現が追加挿入され視覚的な描写がなされている。

次に初稿ではヘンゼルとグレーテルが帰り着いた家を単にdas Hausとのみ表現しているが、初版、第7版ではbei ihres Vaters Haus (お父さんの家)とihres Vatersが追加され、父親のもとへ帰るということが強調されている。子供たちが帰ってきたことに喜ぶ父親に対して母親に関する記述で、初稿ではaber die Mutter war böse. (しかし母親は怒っていた)とそのままの本心が記述されているが、初版では..., die Mutter stellte sich auch, als wenn sie sich freute, heimlich aber war sie böse. (母親も嬉しそうなふりをしていたが、内心では怒っていた)となり、母親の心理がより詳しく具体的に表現されている。

IV

さてどうにか家に帰ることができた兄妹ではあったが、その後初稿、初版ではそれぞれBald darnach hatten sie wieder kein Brod (その後すぐにまたパンがなくなってしまった)、Nicht lange darnach, war wieder kein Brod im Hause (その後間もなく、またパンが家になくなってしまった)と述べられており、さらにこれが第7版ではNicht lange danach war wieder Not in allen Ecken, ... (その後間もなくまた国中が困窮状態に陥った)と記述され、個人の家庭の窮状だけではなく、当時の社会全体の状況という視点からの描写がなされている。

再び夜に母親が父親に子捨ての相談を持ちかける話を初稿では兄だけが、初版と第7版では兄妹二人が聞くことになるのだが、この内容を初稿では母親から父親への要求として間接話法で..., wie die Mutter zu dem Vater sagte, er solle die Kinder hinaus in den großen Wald bringen (母親は、父親が子供たちを大きな森の中へ連れ出すようにと父親に言った) というように記述され、初版では„..., du mußt sie morgen tiefer in den Wald führen, daß sie nicht wieder heimkommen können, ...“ (おまえさんが明日子供たちを森のさらに深くへ連れて行って、二度と帰ってこれないようにしておくれ) と直接話法の強い調子で夫に指示しているが、第7版では前回と同様に直接話法で„..., wir wollen sie tiefer in den Wald hineinführen, damit sie den Weg nicht wieder herausfinden“ (私たちが子供たちを森のさらに深くへ連れ込んで、二度と帰り道を見つけられないようにしましょう) と、妻からの夫への要求ではなく自分たち二人で行う勧誘の表現になっている。これに対して、再び子供を捨てなければならないという状況に置かれた父親の心情が次のように述べられている。初版: ..., und er gedachte, es wäre doch besser, wenn du den letzten Bissen mit deinen Kindern theiltest (夫は、自分がパンの最後の一口をも自分の子供たちと分け合うなら、その方がましだと思った)、第7版: er dachte: „Es wäre besser, daß du den letzten Bissen mit deinen Kindern teiltest“ (夫は、自分がパンの最後の一口をも自分の子供たちと分け合う方がましだと思った) となり、自分に対してそれぞれdu (おまえが)、dein (おまえの) が用いられている。また第7版では、Wer A sagt, muß auch B sagen (Aをいう人はBも言わねばならぬ=乗りかかった舟) ということわざでの表現も追加挿入されている。

再び捨てられることを聞いたヘンゼルは前回と同様に小石を拾うために外へ出ようとするが、今度は母親によって戸に鍵をかけられてしまう。このときヘンゼルは、初稿では..., da fing das Brüderchen an traurig zu werden, und konnte das Schwesterchen nicht trösten. (そのとき兄は悲しくなってしまう、妹を慰めることができなかった) と悲観的な態度で表現されているが、これが初版ではDoch tröstete er die Gretel und sprach: „schlaf nur, lieb Gretel, der liebe Gott wird uns schon helfen.“ (しかしヘンゼルはグレーテルを慰めて言った。「さあお休み、グレーテル。神様がきっとほくたちを助けて下さるよ」) となり、また第7版でもAber er tröstete sein Schwesterchen und sprach: „Weine nicht, Gretel, und schlaf nur ruhig, der liebe Gott wird uns schon helfen.“ (しかしヘンゼルはグレーテルを慰めて言った。「泣かないで、グレーテル。さあもうお休み。神様がきっとほくたちを助けて下さるよ」) というように、初稿と初版、第7版とでヘンゼルの振る舞いが正反対に描かれている。初版、第7版ではヘンゼルの発話中に「神様が助けて下さる」という表現があり、der liebe Gott (親愛なる神) の存在というキリスト教的影響がヘンゼルを初稿とは逆の積極的な振る舞いへ導いたと見ることもできよ

う。

早朝にヘンゼルとグレーテルは起こされ、パンをもらってまた森へ向かうことになるのだが、このパンについて初稿ではein Stücklein Brot (小さなパン)、初版ではein Stücklein Brod, noch kleiner als das vorigemal (前よりずっと小さなパン)、第7版ではein Stückchen Brot, das war aber noch kleiner als das vorigemal (小さなパンだが、前よりもずっと小さかった)と、後の版では描写が細かくなっている。また南部で行われていた初稿、初版に見られる縮小接尾辞-leinが第7版では中部の語法-chenに置き換えられている。

さてヘンゼルは、もらったパンをポケットの中で細かくちぎり、屋根の上で自分にさよならをしているハトを振り返って見ているんだ、と言いながらちぎったパンのかけらを地面にまきつつ両親、妹と共に森へ入って行くのだが、さてその後初稿ではAls sie mitten in den großen Wald gekommen (彼らが大きな森の真ん中にやってきた時)と記述されている部分が、初版ではDie Mutter aber führte sie noch tiefer in den Wald hinein, ... (母親が子供たちを森のさらに深くへと連れて入って行った)、第7版ではDie Frau führte die Kinder noch tiefer in den Wald, ... (妻が子供たちを森のさらに深くへと連れて入って行った)と変化し、子捨ての主体が母親(妻)であることがここで明瞭になる。また初版、第7版ではこの大きな森の真ん中という場所に対して..., wo sie ihr Lebtag nicht gewesen waren, ... (子供たちが一度も来たことがないところ)という具体的な状況説明がさらに追加されている。そして両親が迎えに来ることもなく、ヘンゼルとグレーテルは森の真ん中に置き去りにされるのだが、この場面で初版にはder Mittag verging und der Abend verging, ... (昼が過ぎ、夕方も過ぎて行った)、第7版にも..., und der Abend verging, ... (そして夕方が過ぎて行った)、さらにSie erwachten erst in der finstern Nacht, ... (彼らは真っ暗な夜になってやっと目が覚めた)というような、初稿にはない時間の経過を意識させる記述が追加挿入されている。

ヘンゼルは道にまいてきたパンくずを月の光を頼りに探そうとするが、初稿にはAber die Vöglein hatten die Brodkrümchen aufgefressen und sie konnten den Weg nicht finden.とあり、小鳥たちがパンくずを残らず食べてしまったために帰り道が見つからなかったと記述されている。つまり、小鳥の行動が物語の展開のきっかけを作っているのだが、ここで出てくる小鳥について初版ではdie viel tausend Vöglein in dem Wald (森の何千もの小鳥たち)、第7版ではdie viel tausend Vöglein, die im Walde und im Felde umherfliegen (森や畑を飛び回っている何千もの小鳥たち)というように小鳥に関して詳しい記述が見られ、ここで小鳥という存在が特に印象付けられているように思われる。また、帰り道を見失ったヘンゼルとグレーテルについて、初稿では二人が深い森で迷ってしまったということしか触れられていないが、初版、第7版では2日間森の中をさま

『グリム童話集』初稿、初版、第7版における「ヘンゼルとグレーテル」の変化について

よい歩き、さらに... so hungrig, denn sie hatten nichts zu essen, als ein paar kleine Beerlein, die auf der Erde standen. (二人はとても空腹であった。というのも地面に生えているいくつかの小さないちご以外には何も食べるものがなかったからだ) という記述や、さらに第7版ではUnd weil sie so müde waren, daß die Beine sie nicht mehr tragen wollten, so legten sie sich unter einen Baum und schliefen ein. (そして二人は疲れ果てていたので立ってられず、木の下へ横になり眠り込んだ) といった描写もあり、森の中で迷い苦しんでいた二人の状況が初稿よりかなり具体的に説明されている。

V

森で迷ったヘンゼルとグレーテルは初稿、初版では3日目に小さな家の前が出るが、第7版ではここに至る途中にさらに、二人が雪のように白く美しい小鳥 (ein schönes schneeweißes Vöglein) を見つけ、またその美しい鳴き声に耳を傾けた後、..., schwang es seine Flügel und flog vor ihnen her, und sie gingen ihm nach, bis sie zu einem Häuschen gelangten, ... (小鳥は羽ばたきをして二人の前を飛んで行き、そして二人はある小さな家にたどり着くまでその鳥の後をついて歩いた) という記述が追加されている。ここでも物語が新しい局面に入るポイントにVöglein (小鳥) が登場し、霊性をもつとされるこの存在が物語を導く役割を担っていると言えそうである。

さてヘンゼルとグレーテルが遭遇する小さな家に関する描写について、初稿では、ein Häuschen, das war aus Brod gemacht, das Dach war mit Kuchen gedeckt und die Fenster von Zucker、初版ではein Häuslein, das war ganz aus Brod gebaut und war mit Kuchen gedeckt, und die Fenster waren von hellem Zucker、そして第7版では..., daß das Häuslein aus Brot gebaut war und mit Kuchen gedeckt; aber die Fenster waren von hellem Zuckerとなり、パンで建てられた家、ケーキで覆われた屋根、砂糖 (初版、第7版では白い砂糖) でできた窓、というようにどの版でも共通して具体的に記述されている。また、Stücklein-Stückchen、Häuslein-Häuschenなどで縮小接尾辞の-leinと-chenがどの版においても併用されており、中・南部の表現の間で揺れが生じている。次にヘンゼルがこのお菓子の家の屋根を食べ、グレーテルが窓を食べるという描写を、初稿では平叙文だけで、初版、第7版では平叙文での説明に加えて二人の会話文の形式で表現されているが、第7版ではさらにHänsel reichte in die Höhe und brach sich ein wenig vom Dach ab, um zu versuchen, wie es schmeckte, ... (ヘンゼルは上の方へ手を伸ばし、どんな味がするのかを試してみるために屋根を少しもぎ取った) というヘンゼルの慎重な行動までが描写されており表現に具体性が増している。その時、家を食べている二人に対して、..., wer knupert an meinem Häuschen? (私の家をかじるのは誰だい) と家

の中から声が掛けられ、この声に初稿と初版では二人が大層驚くのだが、第7版でだけはこの問いに対して驚くことなく„Der Wind, der Wind, das himmlische Kind“ (風だ、風だ、天の子だ) という、ヘンゼルとグレーテルのしたたかさを感じさせるような言い訳が返される。またここではhimmlisch (天国の) という語によってキリスト教的印象も与えられている。⁵⁾

続いて家の中から一人の女性が現れるのだが、第7版ではこの時になって初めてヘンゼルとグレーテルはこの女性の姿を見て驚くことになる。さてここで登場する女性について初稿ではeine kleine alte Frau (小さな老婆)、初版ではeine kleine steinalte Frau (小さなひどく年老いた老婆)、第7版ではeine steinalte Frau (ひどく年老いた老婆) とそれぞれ描写されているが、初版と第7版で記述されているsteinaltという語は直訳すると「石のように年老いた」となり、これは「片足をすでに墓石に突っ込んでいる」という意味とされている。⁶⁾つまり後の版では初稿にはなかった侮蔑的な意味が付加されていることになる。また戸口から出てくるこの老婆に関して、初稿では単に...kam... heraus (出てきた) だけの描写であるところが、初版ではschleichen (這う)、第7版では...sich auf eine Krücke stützte (松葉杖にすがり)、...kam herausgeschlichen (這い出てきた) となり、さらに初版、第7版では... wackelte mit dem Kopf ... (頭をぐらぐらさせて) という描写も加わり、この老婆について独特の不気味さが表現されている。

さてお菓子の家に導き入れられたヘンゼルとグレーテルに対して初稿ではgutes eßen (ごちそう)、ein schönes Bett (きれいなベッド) が提供されるが、これが初版 (第7版でもほぼ同じ表現) ではMilch und Pfannkuchen mit Zucker, Aepfel und Nüsse (ミルクに砂糖のかかったパンケーキ、リンゴにくるみ)、さらに第7版ではzwei schöne Bettlein weiß gedeckt (白いシーツがかけられた二つの素敵なかわいいベッド) と寝床の清潔さも強調され、このように詳しく具体的な描写が付け加えられている。また、初稿には述べられていないが初版、第7版では...meinten, sie wären im Himmel (二人はまるで天国にいるように思った) というようにHimmel (天国) という語が現れ、ここでもキリスト教的背景を連想させる表現が用いられている。

VI

お菓子の家に住む老婆について初稿ではそれ以上の説明は記述されていないが、初版 (第7版もほぼ同じ内容) ではDie Alte aber war eine böse Hexe, die lauerte den Kindern auf, und hatte um sie zu locken ihr Brothäuslein gebaut, ... (しかしその老婆は悪い魔女で、子供たちを待ち伏せし、おびき寄せるためにパンの家を建てたのだった) と、この老婆が邪悪な魔女であることが明確に述べられており、⁷⁾さらにその具体的な行動として

「子供を捕まえ、殺し、料理して食べる」という説明が初版、第7版には追加されている。そして第7版にのみDie Hexen haben rote Augen und können nicht weit sehen, aber sie haben eine feine Witterung, wie die Tiere, ... (魔女は赤い目をしており遠くを見ることはできないが、動物のように鋭い嗅覚をもっている) という記述まであり、魔女を危険な動物であるかのように描写する部分が挿入されている。初稿で描かれた老婆の姿が、第7版に至っては明確に悪のイメージを伴った存在として表現されている。

そして翌朝になると魔女の態度は豹変し、ヘンゼルを食べ頃になるまで太らせるために家畜小屋に閉じ込めるが、初稿にのみ..., das sollte ein Schweinchen seyn, ... (それ(兄)は豚として) という記述があり、初版、第7版では削除されている。これに対して閉じ込められたヘンゼルについて初版では、..., war er von einem Gitter umschlossen, wie man junge Hühnlein einsperrt, und konnte nur ein paar Schritte gehen. (ヘンゼルは閉じ込められた若い鶏のように格子に囲まれていて、そして2、3歩しか歩くことができなかった) という具体的な描写があり、また第7版では..., er mochte schreien, wie er wollte, es half ihm nichts. (ヘンゼルがいくら叫ぼうとも何の役にも立たなかった) という悲観的な表現がここには見られる。次に初稿では..., und das Schwesterchen mußte ihm Wasser bringen, ... (そして妹はヘンゼルに水を持って行かなければならなかった) と平叙文で述べられている部分が、初版では..., steh auf, du Faulnzerin, hol Wasser und geh in die Küche und koch gut zu essen, ..., 第7版でもSteh auf, Faulnzerin, trag Wasser und koch deinem Bruder etwas Gutes, ... (起きろ、この怠け者、水を運んで、そしてお前の兄さんに何かおいしいものを作るんだ) というように、使用されている語や綴りには若干の違いが見られるものの、ほぼ同内容の直接話法の会話表現に書き換えられており、より具体的な表現が用いられている。また、初版、第7版でだけ..., und wann er fett ist, dann will ich ihn essen, ... [第7版: „Wenn er fett ist, so will ich ihn essen.“] (あいつが太れば食ってやる) という目的が明確に述べられる。さらにこういった老婆の言葉にグレーテルは泣き出すが、第7版にだけ..., aber es war alles vergeblich, ... (しかし何をしても無駄だった) という悲観的表現がここにも現れる。

さてどの版にも、ヘンゼルには太らせるためにごちそうが出されるがグレーテルにはKrebschalen (ザリガニの殻) しか与えられないと述べられており、男の子と女の子で大きな違いが見られるが、この理由として初稿にだけ..., weil es nicht fett werden sollte. (妹は太ってはいけなかったからだ) という説明が添えられている。次に、様子を見にきた老婆に対してヘンゼルは、自分の指を出す代わりにいつも小さな骨を差し出して、まだ太ってはいないと老婆に思わせるのだが、これに対する老婆の反応が初稿: ..., es dauerte länger. (まださらに時間がかかるだろう)、初版: ..., da verwunderte sie sich, daß ..., 第7版: ..., und verwunderte sich, daß ... (そのことに驚いた) というように、

初稿と、初版、第7版とで反応が異なっている。

いよいよヘンゼルを食べてしまうという段階に至って、初稿では..., wir wollen dein Brüderchen schlachten und sieden, ..., 初版では„..., morgen will ich es schlachten und sieden, ...“, 第7版では„..., morgen will ich ihn schlachten und kochen.“となり、いずれにしても明日ヘンゼルを殺して煮てしまうという計画が語られるのだが、初稿でだけ主語がwir（私たち）となっておりグレーテルをも含めた複数の主語で表現されている。そしてこういった危機的状況を初版では..., und weinte blutige Thränen, ...（そして（グレーテルは）血の涙を流して泣いた）、第7版では..., und wie flossen ihm die Tränen über die Backen herunter!（いかに涙がグレーテルの頬を伝って流れたことか）と描写しているが、こういった表現は初稿には見られない。そして嘆き悲しむグレーテルに対して第7版では老婆が„es hilft dir alles nichts“（何をしても何の役にも立たないよ）とここでも絶望的な言葉をかけるが、こうしたあきらめの表現に対応するように初版では..., du lieber Gott, hilf uns armen Kindern aus der Noth.（神様、私たち哀れな子供をこの苦しみからお救い下さい）、第7版でも„Lieber Gott, hilf uns doch“（神様、どうか私たちを助けて下さい）という神への祈りが挿入され、ここにもキリスト教的要素が織り込まれていることがわかる。

次に、ヘンゼルを食べる前にパン焼き釜でグレーテルをも焼き殺そうとする場面で、グレーテルを釜の中へおびき寄せる口実として初稿では..., sieh, ob das Brot bald fertig ist;（パンがもうすぐ焼き上がるかどうか見ておくれ）、初版では„guck hinein, ob das Brod schon hübsch braun und gar ist, ...（パンがいい色に焼き上がっているかどうか、中をのぞいておくれ）と述べられているが、第7版では„und sieh zu, ob recht eingeheizt ist, damit wir das Brot hineinschießen können.“（パンを押し入れるのに十分（釜が）熱くなっているかどうか見ておくれ）となっており、つまり初稿と初版では釜の中のパンが焼き終わる時点を、第7版ではこれからパンを釜の中に入れて焼き始める時点をそれぞれ捉えて口実としている、という変更点がある。そして初稿：...; sie wollte aber das Schwesterchen darin laßen und braten.（老婆はしかし妹をその中に残して焼いてしまうつもりだった）、初版：... und Gretel sollte in dem heißen Ofen backen, und sie wollte es auch aufessen: ...（グレーテルを熱い釜の中で焼いて、グレーテルをも食べてしまうつもりだった）、第7版：..., und Gretel sollte darin braten, und dann wollte sie's auch aufessen.（グレーテルをその中で焼いて、そしてグレーテルをも食べてしまうつもりだった）のように、初版と第7版ではグレーテルを焼いてしまうだけではなく食べるという目的が追加されている。なお、初稿と第7版では老婆のこのたくらみにグレーテルが自ら気付くが、初版のみでGott gab es aber Gretel ein（しかし神様がそれをグレーテルに教えて下さった）という表現でキリスト教的基盤が示されている。

『グリム童話集』初稿、初版、第7版における「ヘンゼルとグレーテル」の変化について

さて、釜の中の様子を見るように命じられたグレーテルは...: *ich versteh das nicht, ...* (私にはそれがわからない) (初稿)、*„ich weiß nicht, wie ich das anfangen soll“* (それをどうやって始めればいいのか私はわからない) (初版)、*„Ich weiß nicht, wie ich's machen soll; ...“* (それはどうすればいいのか私にはわからない) (第7版) とどの版でも同様に答えて老婆に手本を示すよう依頼し、老婆を釜の中に突き飛ばして焼き殺すという積極的行動に出る⁹⁾。さて釜の中で焼け死ぬ老婆の様子に関して、初稿では... *und die Hexe verbrannte.* (そして魔女は焼け死んだ) とのみ簡潔に記されており、そして初稿ではこの一箇所のみ *die Hexe* (魔女) という語が用いられている。これに対して初版では... *Da fing die Alte an in dem heißen Backofen zu schreien und zu jammern, ..., und sie mußte elendiglich verbrennen.* (その時老婆は熱いパン焼き釜の中で叫び声を上げ、泣き始めた。...そして哀れに焼け死なねばならなかった)、第7版では *da fing sie an zu heulen, ganz grauselig; ..., und die gottlose Hexe mußte elendiglich verbrennen.* (その時彼女はおぞましい声で泣きわめき出した。...そして罪深い魔女は哀れに焼け死なねばならなかった) となり、初版と第7版では悪い魔女としての老婆の最後が生々しい表現で描かれている。なお、この場面で初版だけは *die Hexe* (魔女) ではなく *die Alte* (老婆) が主語に用いられている。その後グレーテルによって家畜小屋から解放されたヘンゼルを第7版では... *wie ein Vogel aus dem Käfig, ...* (まるでかごから出された鳥のよう) と表現しており、ここでも *Vogel* という語が物語の転換点を表すシンボルのよう¹⁰⁾に用いられている。

VII

魔女の家にあった多くの宝石や真珠を持ってヘンゼルとグレーテルが家に帰り着く場面での描写で、初稿では... *und brachten sie ihrem Vater, ...* (それら(の宝石)を父のもとへ持って行った) と事実関係だけが述べられ、初版では *Der Vater freute sich als er sie wieder sah, er hatte keinen vergnügten Tag gehabt, seit seine Kinder fort waren, ...* (父は子供たちと再会したとき喜んだ。子供たちがいなくなってから楽しい日は一日もなかったからだ)、そして第7版では *Der Mann hatte keine frohe Stunde gehabt, seitdem er die Kinder im Walde gelassen hatte, ...* (夫は子供たちを森に置き去りにしてから、一時も楽しく過ごした時間がなかった) というようにこれらの記述から、ヘンゼルとグレーテルが帰り着く対象が家というよりも父親であること、またこの父親が好意的に描かれていることがわかる。これに対して母親の方は初稿、初版で...; *die Mutter aber war gestorben.* (しかし母親は死んでいた) (第7版では *die Frau* 「妻」) と述べられ、父親とは対照的な描かれ方がされている。

さて、兄妹が持ち帰った宝石によって初稿、初版では父親がein reicher Mann (お金持ち) になった、と記されているが、第7版ではDa hatten alle Sorgen ein Ende, und sie lebten in lauter Freude zusammen. (そしてすべての心配事はなくなり、彼らは一緒にとっても楽しく暮らした) と述べられている。初稿と初版では物語の最後に「母親が亡くなっていた」という記述が添えられるが、第7版では子供たちが戻って喜ぶ父親の描写の直後に母親の死が記述されており、子捨てを企てた悪い母親の死と子供たちの帰還、そして持ち帰った宝石による貧困の解消をもってDa hatten alle Sorgen ein Endeという表現が成り立っているように思われる。

なお第7版には、ヘンゼルとグレーテルが森から逃げ帰る際に大きな川に遭遇し、一人ずつ順番に白いカモの背中に乗せてもらって川を渡るという挿話と、最後に物語の世界から現実の世界へと読者をいざなう語りかけの部分¹⁰⁾が付け加えられているが、これらは全く別のエピソードであるため初稿、初版との比較の対象外とした。

注：

- 1) ... für seine Frau und seine zwei Kinder, Hänsel und Gretel.
- 2) 第7版ではさらにこの不安を夫の具体的な発言として直接話法で表現。„Was soll aus uns werden?“ (私たちはどうなるのだろうか) これに対する返事として妻から子捨ての提案が述べられる。
- 3) 初版：..., das kann ich nicht über mein Herz bringen, ..., 第7版：...; wie sollt' ich's übers Herz bringen, ...。「辛くてそんなことはできない」という慣用表現。
- 4) Schwestereben: Schwesterchenの誤植と思われる語がこの場面に一箇所見られる。
- 5) この返事の後、ヘンゼルはさらに屋根をごっそりはがしグレーテルも窓をむさぼるように食べる、という描写が第7版にだけ付け加えられている。
- 6) 野口芳子：『グリム童話と魔女』勁草書房 2002 10頁。
- 7) 第7版ではDie Alte hatte sich nur so freundlich angeestellt, ... (その老婆は親切そうなふりをしてただけで、...) という、魔女の狡猾さを示す記述もある。
- 8) 赤い魔女の目は悪魔の姿として描かれるヤギの赤い目と関連する、という指摘もある。(野口芳子：前掲書 11頁)
- 9) 依存するだけの子供であったグレーテルが幼年期を脱し、主体性を持った大人への一段階を上げる物語とする解釈もある。(ブルーノ・ベッテルハイム：『昔話の魔力』波多野完治・乾侑美子訳 評論社 1978 213~222頁)
- 10) Mein Märchen ist aus, dort läuft eine Maus, wer sie fängt, darf sich eine große, große Pelzkappe daraus machen. (私の昔話はこれでおしまい。そこにネズミが走ってる。それを捕まえた人は、その毛皮から大きな大きな毛皮の帽子を作ってもいいよ。) 物語全体が過去時制を基本に書き進められ、最後のこの文章で現在時制に変わるにより、現実との関連付けが行われているものと思われる。

上記以外の参考文献：

- 小澤俊夫：『グリム童話の誕生 聞くメルヒェンから読むメルヒェンへ』朝日新聞社 1992。
川島淳夫 (編集主幹)：『ドイツ言語学辞典』紀伊國屋書店 1994。

『グリム童話集』初稿、初版、第7版における「ヘンゼルとグレーテル」の変化について

- ヤーコプ・グリム、ヴィルヘルム・グリム（野村滋訳）：『完訳グリム童話集 1』筑摩書房 2005.
- ヤコブ・グリム、ヴィルヘルム・グリム（フローチャー美和子訳）：『初版以前 グリム・メルヘン集』東洋書林 2001.
- グリム兄弟（乾侑美子訳）：『1812初版グリム童話（上）』小学館 2000.
- ガブリエーレ・ザイツ（高木昌史、高木万里子訳）：『グリム兄弟 生涯・作品・時代』青土社 1999.
- マリア・タートル（鈴木晶 他訳）：『グリム童話 その隠されたメッセージ』新曜社 1990.
- 谷口幸男 他：『現代に生きるグリム』岩波書店 1985.
- 野口芳子：『グリムのメルヒェン その夢と現実』勁草書房 1994.
- 野村滋：『グリム童話 子どもに聞かせてよいか?』筑摩書房 1993.
- ウラジミール・プロップ（北岡誠司、福田美智代訳）：『昔話の形態学』白馬書房 1987.
- 吉原高志、吉原素子：『グリム〈初版〉を読む』白水社 1993.
- ハインツ・レレケ（小澤俊夫訳）：『グリム兄弟のメルヒェン』岩波書店 1990.
- Grimm, J./Grimm, W.: Deutsches Wörterbuch. 33 Bde. Leipzig 1854–1971. (dtv '84)